

千葉県八千代市

# 北部遺跡群緊急発掘調査報告

1983・3

八千代市教育委員会

## 序 文

住宅と農業区域が混在する中で、昭和40年後半より急激な開発の進む本市にあって、文化財の保護・保存は急務と言えます。それは開発の好悪に係わらず生活環境の変化をとめない、今迄生活や自然の中で守られ、伝えられてきた伝承や文化が次第に、忘失・散逸・破壊などがありえるからです。そのため市教育委員会では文化財の所在地調査などを行ってみたいところです。

ことに埋蔵文化財については千葉県教育委員会の御指導のもと、照会をとおしての事前協議制を確立するなど、その保存措置を事前に講じるための一助としてきました。そのような中で、国庫・県費補助を得て、調査を実施したものです。

調査の結果、私たちが予想していたものより以上の成果を得ることができました。先人たちの営んだ住居や、つくり、使った土器などをはじめ、吉橋伝説に係る地下式横穴墓群の検出など多大の成果を得ました。資料として本書はこれらの調査の結果をまとめたものですが、活用いただけるならば幸いです。

昭和58年3月

八千代市教育委員会

教育長 大熊章一

## 例 言

1、この本は「八千代市北部遺跡群」の緊急調査の報告で、渋内遺跡（八千代市吉橋字渋内1334番地外）と佐山寺ノ下遺跡（八千代市佐山字子ノ神台2387番地外）をまとめたものである。

2、「八千代市北部遺跡群」とは、市を東西に横走する国道296号線以北を概括して総称したものである。また文化財保存事業として、国庫・県費補助を得て実施したものである。

3、調査は期間は以下のとおりである。

渋内遺跡 昭和58年 2月7日～3月21日

佐山寺ノ下遺跡 昭和58年 3月7日～3月19日

4、本書の執筆は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ-1・3を朝比奈竹男が、Ⅲ-2は秋山利光があたって、朝比奈が全体を統括した。

5、遺跡調査に係る遺物及び図面は、八千代市教育委員会が所掌し、高津新山遺跡事務所に現在保管している。

6、調査にあたって、土地所有者の方々及び地元の方々の御協力、御助言を賜わり、器材等についても御協力を得た。記して謝辞としたい。

石井忠・花沢節・花沢功・小川屋・三角製材所・市区画整理課・市教委青少年課

7、調査組織は以下のとおりである。

**調査主体** 八千代市教育委員会

大熊章一（八千代市教育委員会教育長）

**事務局** 清水盛人（八千代市教育委員会社会教育課長）

小笠原和也（八千代市教育委員会社会教育課文化係長）

川上俊一（八千代市教育委員会社会教育課主事）

**調査担当者** 朝比奈竹男（八千代市教育委員会社会教育課主事）

秋山利光（八千代市教育委員会社会教育課上事補）

**調査員** 久保臨美朗

**調査補助員** 大宮浩一・小郷薫・小野達也・川崎浩祐・小菅雄二・竹田正則・中村稔・根岸

修治・藤川篤・星忠・細窪政・牧山泰敏・山田英典・藤茂美

**調査参加者** 小林健一・小林ヨネ・板倉春枝・立石てる子・村越みつ子・小川奉巳・吉橋とよ・黒沢行江・黒沢まさ・高橋節子・吉川志代・吉川ます・鈴木時了・立石みね子・信田寿子・柴山栄子・石川春代・立石てる・春出文江・高橋助次・春田富美子・入江寛

**整理参加者** 荻原伊津子・佐治節江・大坪智子

# I 調査に至る経過

## 1 調査に至る経過

八千代市は首都圏のベッドタウンとして、昭和30年代初期の八千代台地区の開発を筆頭に、宅地造成の波が寄せている。特に昭和40年代後半からの開発行為の急増は、東葉高速鉄道の具体化とともに、更に急ピッチで進んできたと言える。一例として昭和55年度の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が20余件であったものが、翌56年度は60余件に急増したことで了解できるだろう。

勿論、これらの照会は民間企業による宅地開発が殆んどであったわけであるが、個人による照会も数件行われた。また正規の手続きはとらなかったものの、問い合わせや相談に見られた個人の方々も多々あったことも事実である。

個人による相談や問い合わせは、個人による家屋建築、造成であり、農家による山林伐採、天地返しが主体であった。これらは文化財保護に理解ある方々が中心と考えられるが、住宅都市と発展する一面とそれに対応する近効農業への転換が、これら相談の背景に存在するのであろう。

このような状況のなかで、本市は今迄、市の文化財保護、調査費のうちに埋蔵文化財緊急調査費を計上し対応するようになってきた。しかし常に対処の方法が問題となって、時期を失する傾向もあったことは否定できなかった。そこで八千代市を開発行為が減少してきた八千代市南部（京成電鉄沿線は宅地造成の殆んど終了してきた地域である）と、宅地開発や天地返しなどの傾向が著しい北部に分け、緊急調査に対応する計画をたてたわけである。

市教育委員会は千葉県教育委員会と協議し、それを不特定遺跡の緊急調査として対応すべく、国庫補助金・県費補助金をえて発掘調査を実施することとなった。対象区域は国道 296号線（通称成田街道）以北として、調査を実施することとした。

## 2 調査地

調査対象地の選択については、遺跡該当地は勿論のこと、承諾されることが前提となった。相談や問い合わせの他、文化財パトロールで見発見されたものもあるが、未承諾のものが多々あり、以下の遺跡を調査したこととなった。

1 浪内遺跡 吉橋字浪内1334番地 天地返しと宅造（近い将来）

昭和58年2月7日～3月21日

2 佐山寺ノ下遺跡 佐山字子ノ神台2387番地 天地返し

昭和58年3月7日～3月19日



第1図 調査対象位置図

## II 渋内遺跡

### 1 遺跡の立地と概観

渋内（しぶち）遺跡は、千葉県八千代市吉橋渋内1334番地に所在する。

該地は八千代市の北西部、県道船橋・印西線（木下街道）沿いであり、吉橋工業団地の北方に位置し、農業地域である。また本遺跡は吉橋城跡（室町期）の南西約200mの地点で、吉橋城西方遺跡として知られた、広い面積にわたる土師器散布地として扱われていた衆知の遺跡である。しかし後述する調査結果と、土器散布の広がりから、今回の調査により渋内遺跡として分離した。

本遺跡の立地は、桑納（かんのう）川より南入する谷津にはさまれた台地上の平坦地央部であり標高22mをはかる。水田面との比高は11mで、現状は畑地であった。地元の方々の話によると該地はかつて凹地であったと言い、調査によって客土層が認められている。

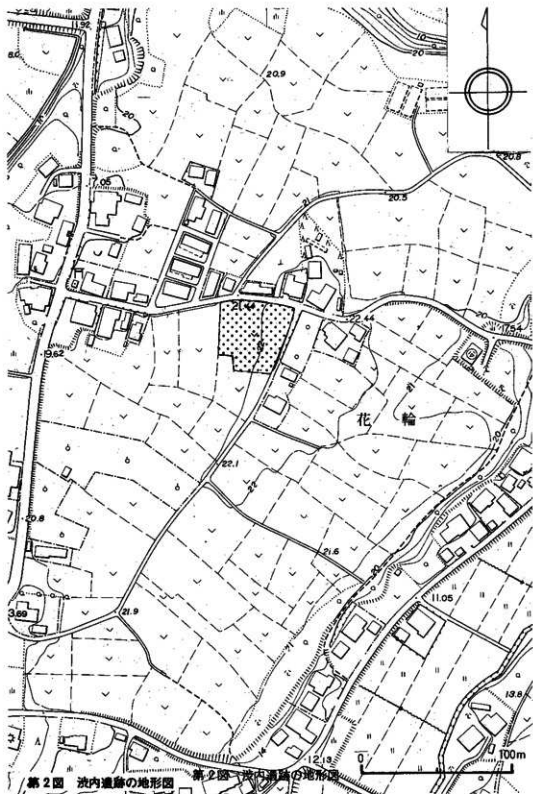
### 2 調査の概要

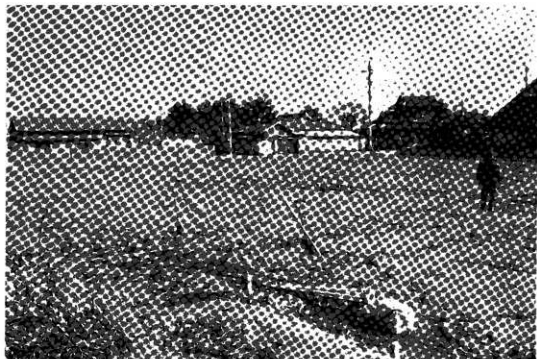
今次の調査は、土師器散布地の一角として扱えられ、現地踏査及び協議において地下式横穴が確認できたこと、吉橋城跡に比較的近接していることなどの条件のもとに実施された。協議の席上で、何度も陥没し危険なため、天地返しを考えており、近い将来宅造を考えていることがわかり、急拠、発掘調査を実施し、記録保存することとなった。

調査は対象地がほぼ方形であったことと、平坦地であったため、5×5mのグリッドを基本として調査区を設定した。調査区の名称は西から東へA・B・C一、北から南へ1・2・3一として、交差した北西杭をグリッド名とした。調査はまず遺構確認に主眼をおき、偶数列を3×4mで試掘を行い、検出後拡張するという方法をとった。その後、土壌・溝状遺構が検出されたため拡張し、精査を行った。

本遺跡の土層については一部に客土（ローム）が認められたが、基本的には3層であった。1層は表土・耕作土で、2層はローム粒混じりの暗褐色土、3層はローム層である。ローム層はハード・ロームであり、溝状遺構などの設置時に、本来の土層は攪乱されたようである。なお標準的な表土からのローム面までの深さは、20～30cmであった。

調査対象面積は13.00㎡で、発掘面積は720㎡であった。



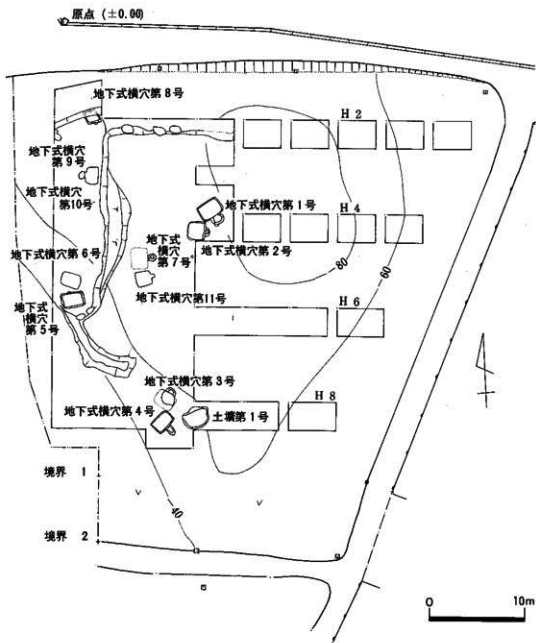


浪内遺跡近景



浪内遺跡発掘調査風景





第3図 法内遺跡のグリッド設定図及び遺構配置図

### 3 遺構及び遺物

今回の調査で検出された遺構及び遺物の主体は中世から近世のものであり、地下式横穴11基、溝状遺構1条が検出された。他に土壌1基が確認されている。

#### 地下式横穴第1号 (第4図)

E-3・4グリッドにわたって検出されたもので、ロームが人為的に斜面にされた部分であった。天井は残っており、斜面上部に向かって横穴を営んでいる。横穴の平面プランは中心線で測ると、長軸1.23m×短軸2.36mで方形乃至北に狭くなる台形状である。横穴高は1.86mで、天井厚は最大1.45mであった。床は白色粘土層を30cm掘り込んでおり、南西コーナーにピットを設けていた。入口部は横穴南側中央部に設けており、径1.20m、深さ1.50mの円柱状である。横穴底とは段差が0.90m程あった。

覆土は入口部崩壊時に流入した表土が殆んどで(1層～3層)、入口を埋めたローム充填層(4層～8層)と、天井の崩壊土(13～14層)とに分けることができた。遺構に伴う遺物の検出はなかった。

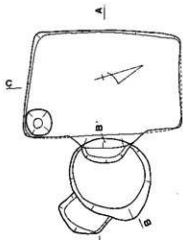
#### 地下式横穴第2号 (第5図)

第1号横穴に隣接して、D4・E4グリッドにわたって検出された。やはり人為的に削平された斜面上部に向かって設けられており、天井は崩壊していた。横穴の平面プランは長軸1.90m×短軸1.78mを測る隅丸方形で、横穴高は1.60m前後である。床は白色粘土、炭を薄く敷いており、入口部には径47cmのP1が白色粘土層を基底として掘り込んでいた。また中央隅及び西壁にP2～P5が白色粘土を基底として設けられ、いずれも埴覆土は粘土の充填であった。入口部は横穴東側中央部につくられ、半円状(不整形)で、深さ54cmを掘り込んで平坦にし、段差1.05mを有して横穴底へ下るものである。

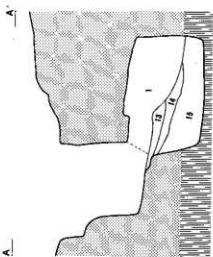
埴覆土は殆んどが天井崩壊土で、ローム一枚乃至塊状の上層であった。入口部は当初不明であったが、ロームを充填しており、上部層は踏みかためた状態であった。遺物は殆んどなく炭化物より若干浮いた状態で板破破片が出土している。これには文字等は見られず、破砕したもの的一端であろうか。

#### 地下式横穴第3号 (第5図)

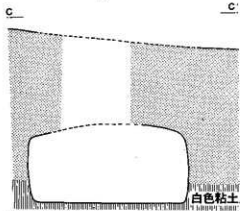
D7・8グリッドにわたって検出されたもので、平坦なローム面で認められた。しかし天井部上位でブラックバンドが確認されており、削平は大きいと思われる。天井は中央部が円く崩壊していた。横穴の平面プランは中心線で測ると、長軸2.28m×短軸1.73mの台形状で入口部の方に



|C|



|C|

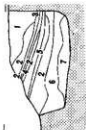
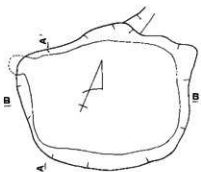


地下式横穴第1号

白色粘土層

## 土層凡例

- |      |       |                 |
|------|-------|-----------------|
| 第1層  | 黒褐色土層 | 表土耕作上           |
| 第2層  | *     | ローム粒を混入する層      |
| 第3層  | 褐色土層  | ハードローム層         |
| 第4層  | *     | 20-50mmのローム層    |
| 第5層  | 暗褐色土層 | ローム若干           |
| 第6層  | *     | 10-20mmのローム若干   |
| 第7層  | *     | 5-20mmのロームを多く含む |
| 第8層  | *     | ローム塊を含む         |
| 第9層  | *     | ロームを含むが均質な層     |
| 第10層 | *     | ロームとの混在層        |
| 第11層 | *     | ローム塊を含む         |
| 第12層 | *     | 白色粘土を含む         |
| 第13層 | *     | 70-100mmローム多く含む |
| 第14層 | *     | ローム粒を含む         |
| 第15層 | *     | 100mm前後のローム多く含む |



第1号 土壌

## 土層凡例

- |     |      |                          |
|-----|------|--------------------------|
| 第1層 | 褐色土層 | ロームブロック、30-50mmのローム塊程度あり |
| 第2層 | *    | ロームブロック、5-10mmのローム       |
| 第3層 | 黒色土層 | ローム若干粒性ある層               |
| 第4層 | *    | 均質な層、焼土若干含む              |
| 第5層 | *    | 黒色土(土)体 5-20mmのローム多い     |
| 第6層 | *    | ローム若干含むが均質               |
| 第7層 | *    | ロームの塊 (200-300mm) が入る    |

第4図 浜内遺跡遺構実測図(1)——地下式横穴第1号土壌第1号——

0 2 m

広がるものである。横穴高は天井の始まりで78cm、推定最大高で1.52mで、天井厚は93cmであった。断面形はドーム形であり、他の横穴に比べその形は極端である。入口は横穴北側中部で、隅丸の方形で横穴底と段差を有するものである。

覆土は1層表土層に近似する層以外は全てロームの崩壊土で、天井のものであった。遺物は1層下部よりアカニシの破片が出土している。むろん天井崩壊土に入る余地はないが、アカニシは他の横穴にも見られるものである。床直層と言ったものは形成されていないが、白色粘土・炭が若干認められた。

また本横穴は横穴4号と隣接しすぎたためにか、南壁の一部が崩壊し、穴があいていた。

#### 地下式横穴第4号（第6図）

D8グリッドにて検出されたもので、人為的に斜面を形成した中に設けられており、ローム面は横穴の南側と北側で、43cmの差を有する。その斜面の上位面に横穴を設けるものである。天井は崩壊しており、一部遺存するのみであった。横穴部の平面プランは中心線で測ると長軸1.86m×短軸1.43mの長方形で、横穴高は1.22m、推定天井厚は0.90m以上と考えられる。確認面からの横穴底の深さは2.33mであった。断面形はゆるいドーム形であり、横穴底はローム最下部であった。入口部は横穴に南側中部につくられ、下場で長軸94cm×短軸52cmを測る長方形で、70cm程掘り込んで平坦面を有するが、全体的に急斜で横穴底へ入るようである。本横穴入口部も、ローム粒子で充填している。

覆土は天井崩壊にともなう上部層が落ちた1層黒色土以外は、全て天井崩壊に伴うローム層である。遺物は本横穴は他に比して多く、アカニシ、骨、陶器片が天井崩壊土下層より出土している。

#### 第1号土壌（第4図）

D8・E8グリッドにわたって検出された遺構で、人為的に削平され斜面を形成した下位に所在した。当初D8グリッドではロームが充填されて踏みかためられたように硬度を持っており、遺構確認に手間どった。確認面でプランを認めることは不明瞭で、任意にセクションを決め、充填部分はずした結果において土壌が確認された。

平面プランは中軸線で測ると、長軸2.57m×短軸1.56mの長方形であった。ローム面の段差（掘込部分の東西）は53cmを測り、その斜面をロームの充填層が被っていた訳である。ローム面から坑底は最大で1.03m、最小で41cmである。

堆積土層はローム層と黒色土とのきれいな交互の繰り返しであり、人為的な埋戻しを推定しようのものであった。周辺には地下式横穴第3号・第4号があるため、入口部とも当初考えられ、土

域周辺を精査したが横穴は認められず、覆土も他の地下式横穴とは違うため、それとは考えられない。なお遺物は陶器小破片が若干出土したのみで、用途、時期は不明である。

#### 地下式横穴第5号（第6図）

B4・5グリッドにわたって検出されたもので、窪地底（溝底？）よりのものである。中軸線で測ると長軸2.85m×短軸2.06mで、横穴高は1.58cmである。床には白色粘土が一部敷かれており、ローム最下層を床としている。平面形は東西に長軸を有する長方形であり、隅は若干丸味を帯びる。底床には東壁に楕円のピットが、南壁中央部には径1.18mを長径とする楕円のピットが所在し、いずれも白色粘土層を掘り込んでつくられていた。入口部は北壁中央部で、円弧状をなすが、明瞭ではなく、ロームの充填によって判断した。平坦面はなく、急斜をもって横穴底へ下るものである。

覆土は殆んどが天井崩壊土であり、4層は白色粘土が多量に含まれていた。6・7層の本土壌に係る堆積土には炭や焼土が混じり、他土壌と基本的には変化がない。天井及び流入土は北壁入口より入り、南壁側へ崩壊していることが理解できた。

なお本遺構に係る遺物の出土はなく、窪地の埋戻しよりは前の段階のものである。

#### 窪地の形成について

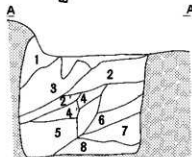
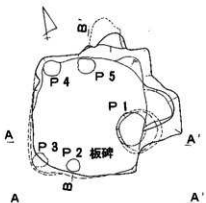
決内遺跡におけるソフト・ローム層の残存は殆んどみられず、立川ローム層ハード・ロームも一部が残っているにすぎないくらい削平されていた。これは地下式横穴の天井厚及び残存をみると、この構築時に削平され、谷津状に窪地が形成されたと考えられる。

第7図に示した土層堆積は、基本的にロームが混じり、また粘土・焼土・炭化物などが混入しており、自然堆積層とは考えられない。現表土層上部から窪地底面迄は最大1.64mあり、人為的に埋戻したと考えられる。

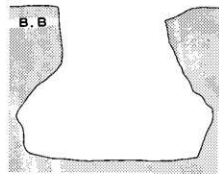
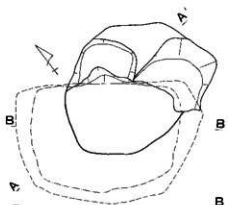
これから考えると、当初溝状遺構と考えていたが、人為的に深く掘り下げて窪地を形成させる必要があったと捉えられまいか。特に地下式横穴がこの窪地の周辺にあること、また窪地形成により台状に残った部分に対して、横穴部をつくるなどを行っていることなどより、当該時期の所産と考え、窪地と捉えたい。

#### 参考文献

半田堅三「本邦地下式横穴の類型学的研究」伊知波良2 1979年

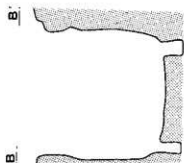


地下式横穴第2号



地下式横穴第3号

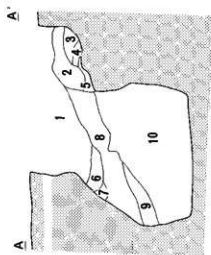
第5図 波内遺跡遺構実測図(2) 地下式横穴第2号・第3号—



土層凡例

- 第1層 白褐色土層 ローム層を若干含む土層に次ぐ層
- 第2層 暗褐色土層 ローム層が多い層
- 第3層 \* 2層に近部、ロームや少ない
- 第4層 褐色土層 ひとみだりの灰色磁土(ハーフローム)
- 第5層 黒褐色土層 ローム少なく、砂子が多い層
- 第6層 暗褐色土層 4層に近部ロームや、多い
- 第7層 暗褐色土層 大きなローム塊が主体の層
- 第8層 暗褐色土層 5-10cmのローム塊との混合層
- 第9層 暗褐色土層 10-30cmのロームが主体の層
- 第10層 褐色土層 大きなローム塊が主体の層

L=原点-1.30m

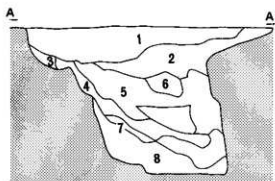
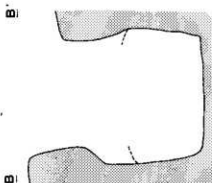
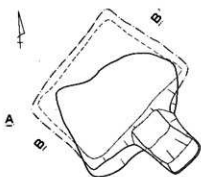


土層凡例

- 第1層 黒褐色土 表土耕作土
- 第2層 褐色土層 10-30cmのローム状、硬質の土層
- 第3層 \* いく少暗褐色土入る層
- 第4層 \* ローム塊や、大きくなる層
- 第5層 \* 崩壊ローム層
- 第6層 暗褐色土 50-200cmのローム塊を含む層
- 第7層 \* 均質な層、包含物なし
- 第8層 \* 20-50cmのロームを塊状に含む層
- 第9層 褐色土層 暗褐色土層入る層
- 第10層 \* 天井構造土

L=原点-0.80m

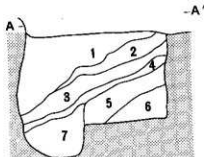
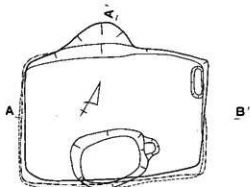




- 土層凡例
- 第1層 赤褐色土層 ロームを多く含む、砂質な層
  - 第2層 赤褐色土層 5cm位のロームが多い混合層
  - 第3層 赤褐色土層 ローム粒の多い混合層、粒子は2-3mm
  - 第4層 赤褐色土層 ローム粒子の混合層、厚みから5cm位のローム粒
  - 第5層 赤褐色土層 ローム層粒を主体とする層 2-15cmのロームが塊状に入る
  - 第6層 赤褐色土層 極めて大きなローム塊が散在
  - 第7層 赤褐色土層 色調は異なるロームが若干入るが不定あり
  - 第8層 赤褐色土層 3-5cmのローム粒を多く含む層 赤褐色土との混合層、ローム塊が部分的に混入する

L=原点-1.10m

地下式横穴第4号



- 土層凡例
- 第1層 赤褐色土層 ハード・ロームの極めて大きな塊が主体、大部分の 収が新境
  - 第2層 赤褐色土層 白色土が混入するローム塊の比較的大きな層
  - 第3層 赤褐色土層 10cm位と100-150cm位のロームとの混合層
  - 第4層 赤褐色土層 30-50cm位と比較的小きなロームとの混合層 自然崩壊土が入る
  - 第5層 赤褐色土層 30-50cm位のロームとローム層粒との混合層
  - 第6層 赤褐色土層 ローム層粒との混合層、赤・黄土・灰土層へに入る
  - 第7層 赤褐色土層 20-40cm位のロームと5-10cm位のものととの混合層 粘土が入る

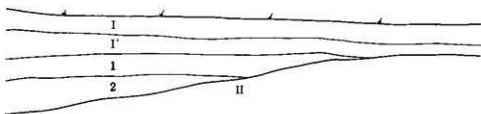
L=原点-1.90m

地下式横穴第5号

第6図 波内遺跡遺構実測図(3)―地下式横穴第4号・第5号―

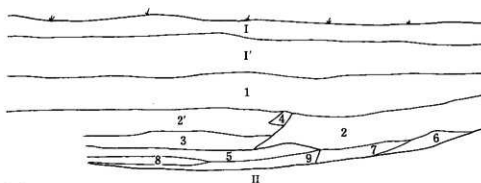
C4

D4



B4

C4

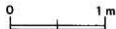


### 土層凡例

- |        |       |                                |
|--------|-------|--------------------------------|
| 第 I 層  | 暗褐色土層 | 表土耕作土                          |
| 第 I' 層 | 暗褐色土層 | I 層に近似するがローム粒を大部含む             |
| 第 II 層 | 褐色土層  | ハード・ローム層                       |
| 第 1 層  | 暗褐色土層 | I' 層に近似するローム粒の多少と層のしまりにより分層    |
| 第 2 層  | 暗褐色土層 | 1 層に比し、や・明るくなるが基本的には同層に近い      |
| 第 2' 層 | 暗褐色土層 | ローム粒子を含む、2 層に近似                |
| 第 3 層  | 黒褐色土層 | ローム粒のや・大きいものが混入し、それが目立つ、や・粘性あり |
| 第 4 層  | 黒褐色土層 | 3 層と同じである                      |
| 第 5 層  | 暗褐色土層 | ロームが斑状に入る、や・粘性としまりのある層         |
| 第 6 層  | 暗褐色土層 | ローム崩壊土との混合層                    |
| 第 7 層  | 暗褐色土層 | ロームは少ない 2 層に似る                 |
| 第 8 層  | 暗灰色土層 | 白色粘土との混合層                      |
| 第 9 層  | 黒褐色土層 | しまりある層、粘土・ローム若干入る              |

L = 原点 ± 0.00m

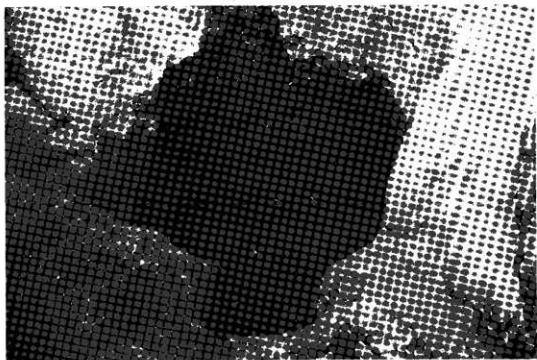
第 7 図 窪地内の土層堆積状態







地下式横穴第1号



地下式横穴第4号

## 遺物

汲内遺跡の調査に係る遺物の出土は、縄文式土器片・弥生式土器片・土師器片から陶磁器片に至るまで、種別・期間は長かったが、量的には極めて少なく、陶磁器片がその主体を占めるものであった。これは遺構に伴う遺物の出土が元来少ないことによるのであろうが、それとともに本遺跡の遺構主体を占める地下式横穴の構築前の窪地の人為的形形成によって、包含層が攪乱され失われたことにもよると考えられる。

地下式横穴覆土中の遺物出土は基本的には希れであり、地下式横穴第2号・第3号・第4号・第8号にみられた程度であった。むしろ窪地覆土中よりの遺物が主体を占めたと考えよう。

地下式横穴第2号からは天井崩壊土と床面直上層にはさまれて、板碑片が出土している(写真)。しかし銘文等はみられず、板碑上部のものとする。また第3号からは天井崩壊土中よりアカニシやスリ鉢(第8図10)が出土している。第4号では天井崩壊とともに、中一下層で極度にもろくなったアカニシの破片とともに骨片(写真)が出土しており、流入土よりは陶器破片・スリ鉢破片が出土した。骨片の出土は、第3号と隣接しすぎ壁が崩壊している部分である。

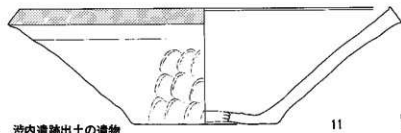
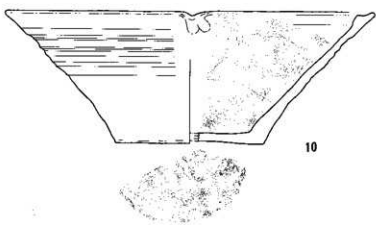
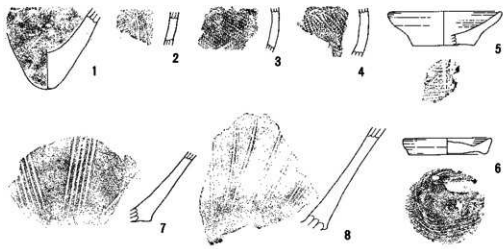
縄文式土器・弥生式土器(第8図1~4)は量的には極めて少なく、早期尖底部(1)や後期のもので縄文式土器は後期が主体である。弥生式土器も後期のものである。

第8図7~10はスリ鉢で、砂質のものである。刻み目は10条前後の櫛歯状のもので行っている。11は鉢で口縁部分のみ釉がかかる。また、洪武通宝が窪地覆土中より出土している(渡来銭かどうかは鑑定中)。

## 4 まとめ

汲内遺跡の調査の概略について述べてきたが、表土層が深くかつ厚薄が極端であったため、調査期間の長期化があった。表土層の厚薄は浅いところで30cmであるが、これは殆んどなく、1mを超えるものが多かった。当初地下式横穴数基は土地所有者の話から知ることが出来たが、吉橋城跡に近接することから、それに直接的に関連する施設の検出をも想定したが、地下式横穴群の検出は予期しえなかったことである。

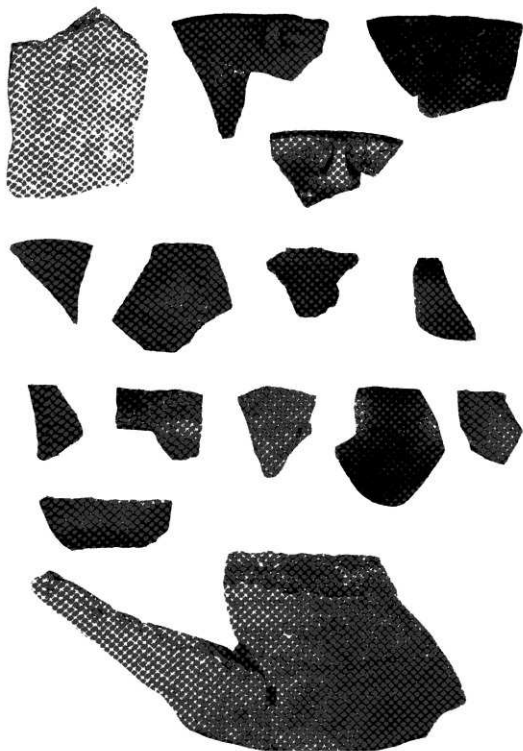
立地の現状は標高22m前後の平坦地であるが、地元の方々の話では、かつては窪地であり大雨が降ると雨水が溜ったと言う。そのため一部客土層が認められたが、20cm前後の客土であった。調査の結果では人為的にロームを削って溝状乃至窪地を形成していた。その溝状の覆土はローム粒を含む暗褐色土であり、自然堆積土とは認められなかった。そしてD3・4グリッドからC7グリッドへ向って調査区を斜めに細く馬背状にローム面を残し、高くしている。また削平状況はローム平坦面で検出された地下式横穴第3号・第4号でみると、ブラックバンド近く迄下げており、相当量の削平が行われたと考えられる。この溝状(窪地)の形成及び平坦面(馬背状)の平坦



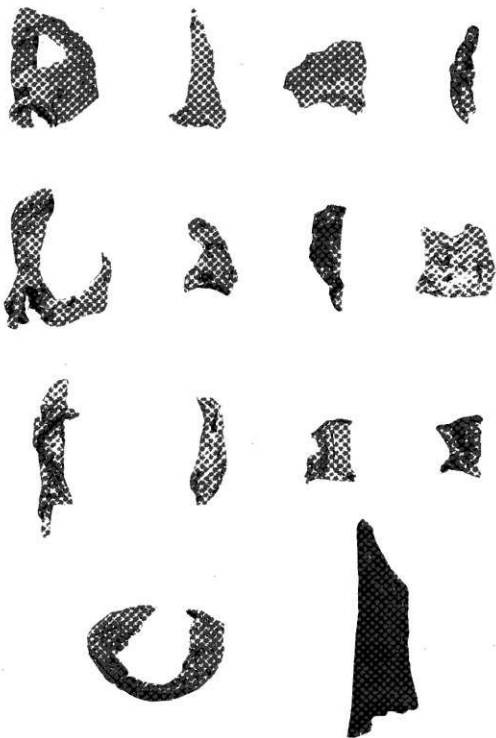
第 8 図 洗内遺跡出土の遺物

11





波内遺跡出土の遺物(2)



茨内遺跡出土の遺物(3)

面)の形成は、各地下式横穴の天井厚などからみると、同遺構の構築時になされたのではなからうか。

地下式横穴の構築状態であるが、人為的につくられた斜面部に存在するもの(1号・2号・3号・4号・8号)、窪地底に存するもの(5号・6号)、馬背状の平坦に存するもの(7号)などがあり、選地はいくつかに分けられるようである。しかしローム削平によって横穴底が白色粘土層を掘り込むか(1号)、それに近接するもの、底にあるピットか白色粘土を掘り込んでいるもの(2号・5号)などあり、排水の面では極度に悪条件であったと考えられる。

平面プランからもいくつかに分類できるが、大きくは横穴の方形状のものと、台形状のものとに分けられる。同様に入口プランも円形と方形に分けられるが、このプランの変化に時間的な差があるかどうかは、本遺跡では遺物出土が希れであるため断定はしかねるものである。入口部と横穴底面との差があり、段差を有するものが主体であるが、5号の様は弧状の不明瞭な入口部のものもあった。

入口部の堆積土層については、今回確認できたことは、ローム粒(5mm~30mm位のもの)によって充填されていたことである。天井崩壊した横穴や残存するものでも、入口部にはローム充填層が残り、確認面における堆積層は踏みかためたように硬度をもつものが多かった。この結果、確認面での入口部確認は不明瞭(特に天井が存在するものは)で、意識的に地下式横穴の閉鎖を行っているようであり、他者から隠すような感を受けた。これについては八千代市高津新山遺跡(註1)でも認められ、隣地で検出されたもの(註2)も同様であった。

本遺跡の形成時期の問題であるが、遺構から確定できる遺物の出土が希れであるため、なお不明であると言うべきである。しかし2号より出土した板碑片や周辺から出土する常滑破片や、吉橋城跡との関連をもし考慮するとするならば、各横穴に時間的な差はあるとしても、室町時代と言えるだろう(註3)。また隣接する畑でも農業用水槽を設置する際に1基地下式横穴が陥没しており、吉橋公会堂の敷地でも「穴があいた(土地の方々)」と言う。これからみると該地は地下式横穴群として扱えられ、より広範囲な展開が想定されるものである。

註1 八千代市教育委員会「千葉県八千代市高津新山遺跡Ⅱ」1983年

註2 調査中に水槽設置が行われ、埋設するため深さ約2mほど掘った時に、天井部が崩壊し確認されたものである。断面には入口の竪坑がはっきりと認められた。(写真撮映のみ)

註3 八千代市中世館城址調査団・八千代市教育委員会「八千代市中世館城址調査報告」1976  
この報告の中で村田一男氏は該地を吉橋城内として扱っているが、範囲不明瞭な点があるため吉橋城外として今回は扱った。

参考文献 半田堅三「本邦地下式横穴の類型学的研究」伊知波良2・1979年

### Ⅲ 佐山寺ノ下遺跡

#### 1 遺跡の立地と概要

今回発掘調査を実施した佐山寺ノ下遺跡は、千葉県八千代市佐山字子ノ神台2390番地に所在する。概略の位置は八千代市の北西端であり、本市指定文化財の「佐山の獅子舞（三匹獅子・無形民俗文化財）」が奉納されるひとつである妙福寺の裏手にあたる。

本遺跡は印旛疎水として開削された新川を東に、神崎川を北に眺む台地にある。国道16号線より北西へのびる大きな台地が小支谷を樹枝状に入り込ませながら、標高20～27mで形成されている。この台地の北端部縁辺に選地しており、標高は20mで、水田面との比高は15mである。調査区周辺は平均20mの平坦部縁辺で、北側は急傾斜をもって水田面を下るところである。（第9図）

本遺跡は先土器時代から平安時代の長い期間にわたって営まれた遺跡として知られており、集落遺跡として扱われていた。先土器時代ではナイフ形石器（黒耀石製）が表採されており、一部調査を実施したところによれば鬼高期の住居址が検出されている。一方、本台地とくに佐山・平戸台地区は遺物の散布が極めて多く、先土器は希れであっても、縄文・弥生・古墳・奈良・平安といった集落址や包含地が全面的に広がっているところである。

#### 2 調査の概要

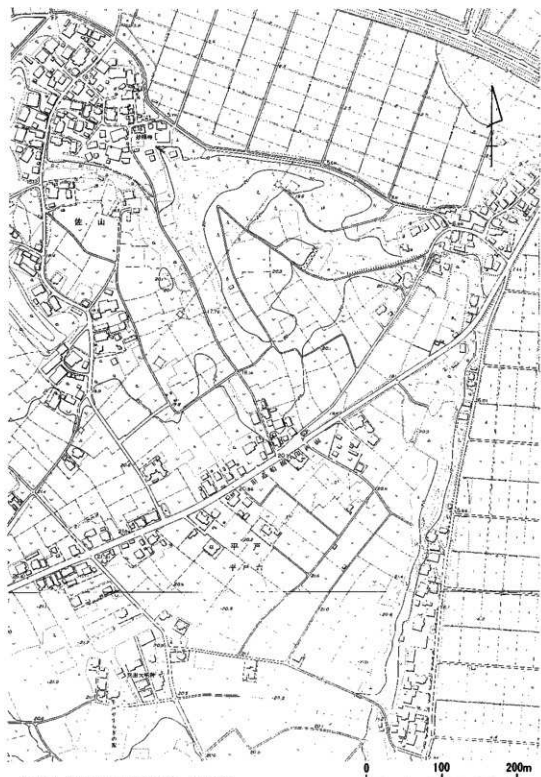
今回の発掘調査は、表面観察のみならず隣地の調査（昭和53年・鉄塔建替に伴う）によって集落遺跡として確認されている対象地であった。昭和40年代半ば頃に、対象地東側の斜面部（現在削平されている）の畑を耕作しやすいようにと削平したとき、完形土器の出土もあったという。天地返しに対しての協議前後に現地踏査した結果、削平断面に遺構が確認されたことや、土器散布が目立つ本遺跡の広がり把握を、削平部崩壊により遺構が次第に壊れてきていることなどにより、調査を実施した。

調査対象地は、東側が削平面であり、南北に細長く広がる狭少なものであった。このため対象地に沿って南北に任意に調査基準線を設定しトレンチ発掘を実施し、検出遺構を調査した。

調査区は、南から北へ向ってⅠ・Ⅱ・Ⅲ区と呼称することとした。

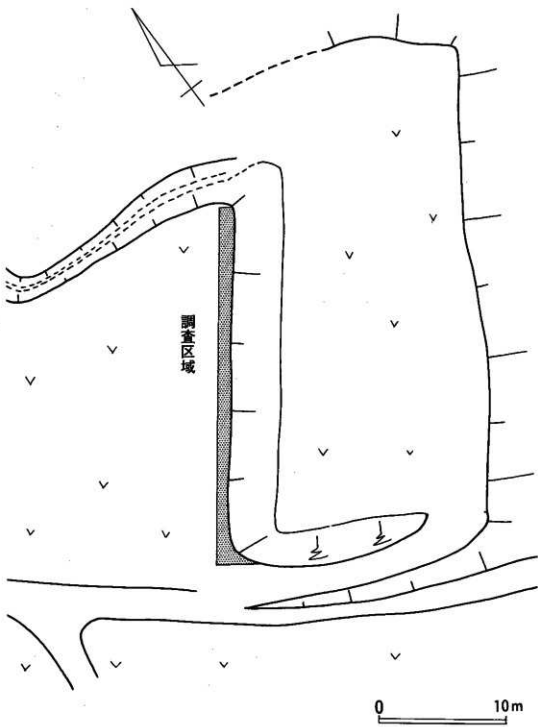
基本土層は3層に把握され、表土耕作土層30cm（Ⅰ層）、遺物包含層である暗褐色土層68cm（Ⅱ層）、ローム（Ⅲ層）であった。

なお調査面積は東西3m×南北30mで90㎡である。



第9図 佐山寺ノ下遺跡地形図 (1/5000)





第10図 佐山寺ノ下遺跡の測量図

### 3 遺構及び遺物

#### 第01号住居址 (第11図)

本住居址は調査区域南端より検出されている。現地表面から住居址床面まで約1 m程の深さを計る。住居址の規模は壁がきわめて一部分にしか確認されていないため、推定することも不可能である。しかし、比較的大きな住居址であることが想定される。部分的に検出された壁も崖際であったためか20cm程の立ち上がりしか確認できない。また南端で確認された壁は西側でロームが傾斜し、掘り込んでいる状況が認められ、重複の可能性も有る。北側は溝状遺構により壁の大半と床面を掘り込まれており、壁の下場で60cm程しか遺存していない。

住居址の覆土は暗褐色土が主体を占めており、ローム粒子・焼土粒子などが混入する。この層は2層に相当する。また床面直上層として褐色土層があり、ローム粒子を多量に混入している。3層に相当する。この部分では住居址の明確な埋没状況を把握することができないが、自然埋没と考えられる。

床面は遺存状況が良好で、またハードロームを直に床面としており、硬く踏み硬められた状態で明瞭に検出されている。床面には火を受け焼土化した部分は確認されていない。

柱穴と確定できるものは検出されていないが調査区域西端に Pit 1 を掘り込んでいる。直径80 cm程の円形を呈しており、深さ80cmを計る。覆土上層の状態から判断して住居址の埋没とともに埋まっている。しかし、底面近くにローム小ブロックを多量に混入した層（5層）があり、この部分は埋めもどされた可能性がある。

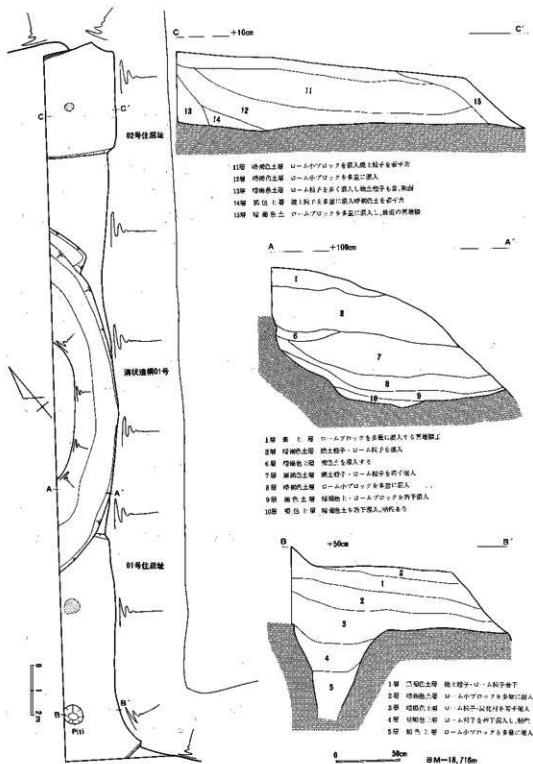
図示した焼土ブロックは床面より25cm程浮いた状態で確認されている。遺物の出土は多くはなく70点ほどである。壺（1）は床面直上より、高坏の坏部は2層中より出土している。磁石は焼土の東側の2層中において出土する。

#### 第02号住居址 (第11図)

本住居址は調査区域の北端8 m程検出されている。現地表面から130 m程の深さで床面を確認している。南壁と北壁の一部分が確認されており、壁間はおおよそ4 m前後のものである。規模・形状については01号住居址と同様に調査区域の限定により、明瞭には判明しない。

壁高はローム面までの高さで48cmを計る。南壁は遺存状況が良好であり、調査区域の幅で確認されており、ほぼ直線的である。北壁は台地の傾斜のためか西側の部分、1 m程しか検出されていない。また、堆積状況から判断して、西壁は調査区域外のわずかなところにあると想定できる。

住居址の覆土は暗褐色土が主体を占めており、ローム粒子・焼土粒子・黒褐色土の混入の差により分層される。壁際層は13層と14層に相当する。褐色土層であり、暗褐色土と焼土粒子を多量



第11図 佐山寺ノ下遺跡遺構配置図及びセクション図 (1/150・1/30)

に混入している。

床面は01号住居址と同様に、良好に遺存しており、ロームを踏み硬めて形成している。中央付近に床面が焼土化している部分があるが、焼土の密度は高くない。30cm程の範囲に広がる。

遺物の出土状況は大半が焼土の周辺に広がり、床面直上層である12層中からの出土である。

#### 溝状遺構01号 (第11図)

本遺構は調査区中央一帯に検出されたものである。溝の底面は現地表面から1.1m程下に確認されている。

形状は調査区域外に大きく延びており、全景は不明であるが、弧状を呈している。断面は上端を大きく開くような「U」字形である。溝の深さは東側を部分的に削られているため不明であるが、西側で一部分検出されたロームの上面では70cm程の高低差がある。

この溝状遺構の覆土は、暗褐色土と褐色土よりなり、上層には暗褐色土層(8層)が堆積している。小ロームブロックを混入し、褐色土の混入も若干みられる。下層には褐色土層(9層、10層)が堆積しロームブロック、暗褐色土が混入している。この層は2層に分かれ、暗褐色土の混入の割合により分層した。さらに10層はわずかに粘性がある。

この溝状遺構は01号住居址を切り、床面を掘り込んで作られている。

遺物の出土状況は、溝内8層より多くの遺物を出土しており大半が土器の小破片である。しかし、台付甕は完形の状態で調査された北側の8層中より横倒しの状態で出土している。

#### 遺物

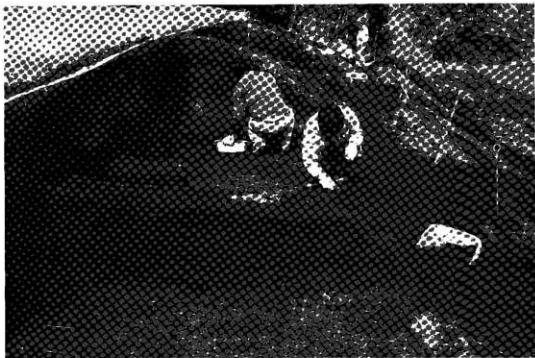
本遺跡の発掘調査に係る出土遺物は、調査対象地の狭少さに比して、各時代にわたって多くのものが認められる。90㎡余の対象地の限定性をもちつつも、多様性を持つ遺跡のあり方を示唆するものであろう。

縄文時代の遺物は全て土器破片で、中期加曾利E式を主体とする。だが、該期の遺物は少なく加曾利EⅡ式及び末期に位置するものである。弥生式土器は遺構内・外より出土しており、後期久ヶ原式及びいわゆる印旛・手賀沼系土器が主体である。土師器は古墳時代を通じての遺物であるが、奈良・平安時代の土師器・須恵器は希れであった。

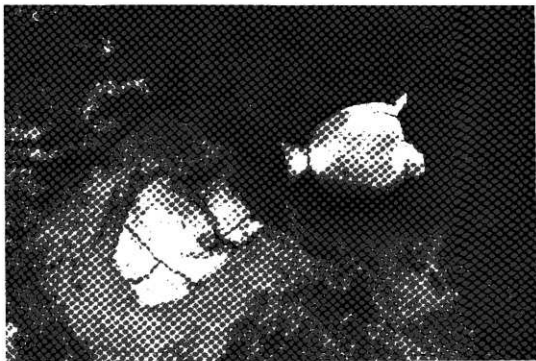
##### 第1号住居址の遺物

覆土中及び床面直上より弥生時代後期のものが出土した。

1は短頸壺と考えられるもので、頸部以上は失われている。底径79mm、胴部最大径134mm、頸部接合部径67mm、現存高92mmを測るものである。全面付加状を施し、底部は深く木葉痕が残る。赤味をおびた色調で、他の遺物と胎土は違う。2は口唇に押圧による小波状を繰り返すもので、



発掘調査風景



溝状遺構内遺物出土状態

頸部に輪積痕を残すものである。推定口径26mmである。色調は外面黒色で、内面横方向の丁寧な磨きを施すものである。3は口唇部は押圧による小波状にしたもので、ナデによる整形である。他に高環々部・砥石が出土しており、坏部は丸味をおびるものである。

これらの他に小破片が出土しているが、後期久々原式及びそれに併行する時期の所産である。

#### 2号住居址出土の遺物

土師器の甕は、頸部下は縦、胴中位は斜方向のハケ撫整形を行うものである。胴部下はヘラ削りを行うものが出土。中位のは浅く幾分力を抜いて引いているようである。後者は粗雑なつくりで推定口径175mmである。外面はヘラによる整形で、内面は、ナデで整形する。台付甕の台部は多く、1点は煮沸に使用しており内底に黒色の煤が付着する。甕台の破片は孔があくものである。以上本遺構出土の土器は五領期のもと考えられる。

#### 溝状遺構01号の出土遺物

台付甕が出土している(写真)。器高209mm最大径163mm、口径161mmを測る。口縁を横ナデ、胴部を縦のハケナデ、台部は若干ていねいにナデている。胴中位にはススが付着しており、煮沸に使用した土器と考える。色調は赤味をおびる褐色である。

## 4 まとめ

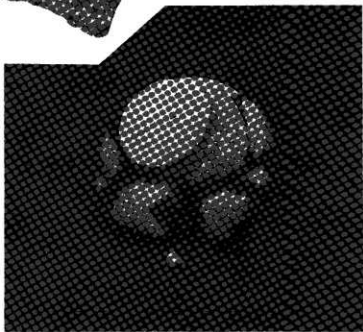
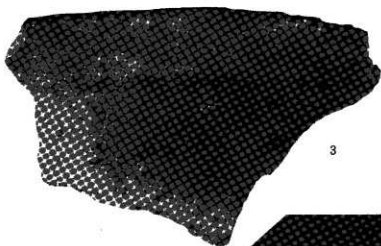
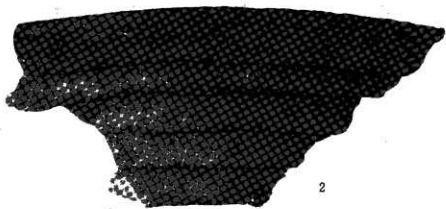
以上、佐山寺ノ下遺跡の発掘調査の概要を記してきたが、調査対象地の制約があり完掘できた遺構はなかったが、住居址2軒、溝状遺構1条が検出されるなど、当初予想していたよりも多くの成果を得ることができたと考えている。遺構内外を問わず、また時代的に限定されずに遺物が出土したことは、遺構の時期決定にむずかしい面があったことを記しておく。

集落遺跡として扱われている本遺跡では、その範囲確定も必要となっているが、その一端を明らかにできたと考えている。また遺物包含層の存在も知ることができ、今後、調査が要求される時、より慎重な作業を必要とするだろう。

弥生時代後期の第1号住居址では、いわゆる印旛・手賀沼系土器と共に久々原土器の共伴など該地における新たな知見を得ることができた。阿蘇中学校東側遺跡、道地遺跡とともに資料が加わったわけであり、今後該期の歴史を知る貴重なものとなろうと考える。

古墳時代の第2号住居址は台付甕の台部の出土が多く、甕は未調査区に包蔵されているものと思われる。東京電力の鉄塔建替時の調査においては兔高期、国分期の住居址が調査されているため、土師器を使用した時代は長い間集落として遊地したと考えられる。

これらのことから本遺跡はかなり広範囲な集落遺跡として考えられるが、今次調査範囲は狭少であり、その一端をあきらかにしたにすぎない。



第1号住居址出土の遺物

千葉県八千代市  
北部遺跡群緊急発掘調査報告

—昭和57年度調査の概要—

印刷日 1983年3月25日

発行日 1983年3月31日

発行 八千代市教育委員会

印刷 (株)山下印刷